



7. 遠賀川魚道公園への想い

遠賀川魚道公園の完成を祝して、これまでに遠賀川多自然魚道プロジェクトに関わってこられた多くの方々に、プロジェクトおよび遠賀川魚道公園に対する想いを綴っていただきました。



波多野 茂丸

芦屋町 町長

遠賀川は、芦屋で生まれ、育った、私の母なる川でございます。このため遠賀川に対する愛着は、人一倍あると自負しています。芦屋中学校の校歌2番の出だしは、「遠賀の川の洋々と」で始まります。このように多くの芦屋町民も遠賀川には、愛着を感じていると思います。

この度、遠賀川河口堰の左岸に「遠賀川魚道公園」が完成いたしました。平成20年度（2008年度）の河口堰魚道を考える懇談会の発足から、6年もの年月を経てのことです。この間、国土交通省遠賀川河川事務所のご尽力はもとより、専門家の先生方、住民ワークショップの方など、多くの方たちにより、小魚の観察ができる憩いの親水空間としての公園整備が進められました。その上、平成25年度（2013年度）のグッドデザイン賞を受賞するという快挙です。

つきましては、芦屋町の地にこのような公園を整備していただいたことに感謝申し上げます。ともに、なお一層魅力あるものにするための維持管理に努め、芦屋町民はもとより、多くの方々に楽しんでいただければと思います。



鶴原 洋一

芦屋町 副町長

私は、当時企画課長だったことから、平成21年度の、遠賀川河口堰魚道改良に係るワークショップの立ち上げ時から、この事業に関わってきました。地域の方々には、快く参加、協力をしていただきました。これは遠賀川というものが皆さんの心根の中に深くあったからでしょう。

ワークショップでは、国交省の皆さんなどのおかけをもちまして、子どもから老・壮年という幅広い世代の皆さんが、模型をもとに多くの貴重なご意見をいただくことができたと思います。

平成22年度（2010年度）からは、副町長に就任したことから、「河口堰魚道を考え、望ましい遠賀川を次世代へ繋ぐ懇談会」に参加させていただきました。専門家の皆さんの貴重なご意見をいただくことが出来、大変参考になりました。

そして、完成したこの公園の名称を「遠賀川魚道公園」と命名したところです。

これからは、小魚の観察教室などや、地域住民の憩いの場として、多くの皆さんに親しまれる公園に、守り育てて行きます。



小野 勇一

九州大学名誉教授
北九州市顧問

この度は、受賞おめでとうございます。
一級河川遠賀川の河川両岸はコンクリートで固められ、自動車道路となっているのですが、河川敷は竹林や草原や公園などとなり、優しい感じを与えてくれます。

それでも河口堰付近は防潮堤が両岸とも海に突き出てとても殺風景でした。このたび、事業所や地域の人々や大学などのご努力で魚道公園が出来、受賞の運びとなったことは、計画に関わりあったものの一人として心から喜んでおります。

川は本性としてくねくねとしていますので、今回の魚道もくねくねラインとし、遠賀の砂礫を使って作られています。子供達にも石を持って置いてもらい、ハゼやカニたちの隠れ家としました。川の出来方や生物との触れ合いが子供達の学習に役立つよう、願っています。

この特徴は直魚道が接海に接しているので沢山の河口の動物たちが住みついてくれ、公園の稼動を通じて遠賀野本流へも移動するものと思いません。多くの人の手が加わることで、魚道公園への愛着が生まれるでしょう。

短い期間にもう自然風景の一部となりつつあります。時代を超えて本流の流れに寄り添う存在になることに期待しています。



鬼倉 徳雄

九州大学大学院
アクアフィールド
科学研究室
助教

魚道の大切な役割は生き物の移動ルートを確認することである。海と川の間を行き来する通し回遊魚はもちろん、出水で堰下に流された純淡水魚類も遡上できれば、河口堰に設置される魚道として十分に機能していると判断できる。通し回遊魚ウナギの子供、遊泳力の乏しい純淡水魚ツツフキが、この新設された魚道内で多数採集されており、多くの魚種の移動ルートとして機能する優秀な魚道であると評価したい。

そして、もうひとつ。遠賀川の場合、河口堰建設によって汽水域の長さが3/4程度失われたせいか、九州の一級水系の中では汽水に定住する魚類の出現種数が明瞭に少ない。つまり、「汽水域の不足」がこの川の生物多様性を低下させる大きな要因であった。この新設魚道の水路延長はわずか100m強に過ぎないが、その中に汽水区間が創出され、水路床の石礫に数種のハゼの仲間が産卵するようになった。この汽水性ハゼ類の産卵は、魚道の中に小さな汽水域生態系が創出されたことを示す明確な証拠である。

河口堰魚道の大切な役割は？これまでは生物の移動ルートの確保だけが注目されてきたが、これからは生物の移動に加えて堰で失われた汽水域生態系の代替地としての機能にも目を向けるべきである。そして、遠賀川河口堰の多自然魚道は、その両方の役目を担うことができた最先端の魚道で

ある。全国の河川に普及することを期待したい。



ゴクラクハゼ産卵



ウナギの遡上個体



遠賀川
河川環境保全モニター

淵上 信好

河口堰の竣工1983年（昭和58年）。私は山梨県の養魚場にいた。着工は1969年らしいので、この地から上流約30kmの飯塚市で小学生をやっていたことになる。全盛期の「ぜんざい川」ではなかったと思うのだが、それでもあの黒い粒子は覚えていいる。その川が辿り着く河口で「堰」が作られようとしていた事など全くの「圏外」だった。

成り行きの積み重ねで遠賀川と関わるようになった1994年（平成6年）。「魚がのぼりやすい川づくり推進事業―第3次指定」の現地視察のこと。魚道内で蟻集するハヤ型の小魚を見て、「アユでしょう」と委員の先生方の前で言い放ってしまった。後ろ髪をひかれるかのように翌日、投網を打った。ワタカの群れ。紛れもなく一生を淡水で生活するワタカだった。透明度など言い訳はいくらでもあるが、詫び状の提出は決定的。「遠賀は捕まえてからしかモノは言えない」の教訓を魚道から教わった。

あれから20年。これまた成り行きで九工大の学生さんと多自然魚道の魚介類調査をやっている。フェンス越しに大破覚悟で投網を投げ込まなくてもタモ網ひとつで取り出せる。高校生物のテスト問題だけの為にあるようなメガロツパ（カニの幼生）も、予想外の速さでバケツの中で泳ぐ。生きた教科書と未知の真実がここにはある。



芦屋東小学校
教諭

池田 敬一

「人にも魚など生き物にもやさしい

遠賀川魚道公園」づくり

子どもたちと参加して

川のそばなのに

川のことをよく知らない

芦屋東小学校は、遠賀川の河口近くの学校で、すぐ横を支流の西川が流れています。しかし子どもたちは、川は危ないところ、行ってはいけない場所として禁止されているため、ほとんど川のことを知りませんでした。

2009年（平成21年）に国土交通省遠賀川河川事務所より河口堰の魚道を作り直し、新しく魚道公園（仮称、以下略）に整備するので、ぜひ子どもたちの意見を聞かせて欲しい、と言われました。また、授業や行事で利用する学校からの要望も聞かせて欲しいということでした。計画段階から参加できるというので担当教師を決めて（私です）、子どもたちに参加者を募集しました。すると当時の4年生から6年生までの中から約30人が応募して参加することになりました。

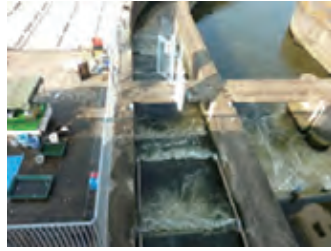
魚道と魚道公園予定地で生き物を捕まえた

第1回目学習会は2009年10月31日（土）対岸にある遠賀川河口館で行われました。はじめに遠賀川について思い浮かぶことをイメージマップに書きました。遠賀川にはあまり触れていないので、さっぱり書けませんでした。

しばらく書いた後に国土交通省の人や魚の専門家と一緒に実際に魚道に行きました。その場所は、いつも遠足に行くときに通る道からすぐ下りたところでした。はじめに新しく整備する予定の砂浜で磯の生き物をつかまえたり網で魚をとったりしました。次に普段は入ることのできない魚道に案内されました。この日のために特別な安全対策をして水量も調整してくれました。はしごを下りて水の中に入ると、大きな魚がたくさんいるのに驚きました。この魚道があるから魚がのぼっていいんだと実感しました。子どもたちは歓声を上げながら魚やエビのような生き物をつかえました。陸上上がったから「魚おやじ」と呼ばれる魚の専門家の淵上さんから詳しいお話を聞きました。ボラ、ギンブナ、モクスガニ、テナガエビほかいろいろな種類がいました。河口館に戻る前に上から魚道を見ると本来の水量で川の水が勢いよく海に向かって流れていました。河口館では、新しい魚道公園の模型を見ながら大まかな計画を教えてもらいました。その後イメージマップを書くとき々に思い浮かんできました。そしてどんな魚道公園にしたいかいろいろアイデアが出てきました。



大きな魚がたくさんいました (2009.10.31)



2009年当時の河口堰魚道



魚の専門家の話を聞く (2009.10.31)



魚道の中に入る (2009.10.31)



大人に混じって意見発表する子どもたち (2009.12.7) (左上・右上・右下)
子どもたちが描いた魚道の絵 (左下)

大人に混じってワークショップに参加！
第2回目からは、夕方河口館で、国土交通省のほか環境工学や生き物が専門の大学の先生方や水道、水質が専門の人、近隣の行政の担当者、地域の各方面の代表者（漁業、自治会、高齢者ほか）といっしょに芦屋東小学校の子どもたちがワークショップに参加しました。
小学生ならではの発想に評判が上々でした。環境に配慮した公園にするためにその目的に合った意見が取り入れられました。学校の意見としては、学習で利用するための安全と使いやすさについてのアイデアを出しました。その後、子どもたちが思い描いた魚道公園の絵をパネルにして魚道近くにたくさん掲示していただきました。

4年生が魚道工事の歴史の目撃者になる！

2010年度（平成22年度）からは芦屋東小学校の教育計画に位置づけて当時の4年生が総合学習で引き継ぐことになりました。この4年生が6年生になって卒業する頃に魚道公園が完成するというのです。それでこの学年だけは特別に3年間連続で遠賀川について多方面に学習しながら、工事のはじめからできあがるまでの目撃者になることにしました。はじめに参加した子どもたちと一緒に将来、自分たちの地域の魚道公園として大切にしていくと確信しています。なお、本校ではこの年から総合学習のカリキュラムに位置づけ、理科や社会科の学習とも関連させて、毎年4年生が遠賀川の学習をしています。

魚道に生き物のすみかを作ろう！

2012年度（平成24年度）、4年生から学習してきた子どもたちが6年生になったとき、工事が完成に近づきました。ここで、ほぼ完成した新しい魚道に生き物が隠れたり棲んだりできるように、子どもたちが生き物のすみかを作ろうということになりました。川を上下する魚などの生き物にとって、どんなすみかにするか調べることにしました。専門家の話も聞いて設計図を描き、気持ちも高まってきました。5月11日国土交通省や設計した九州工業大学の伊東啓太郎准教授、芦屋町役場、工事担当など多くの方々のご協力のもと、魚道にいろいろな大きさの石を置いていきました。生き物のすみかになるように願いつつ、グループごとに工夫を凝らしました。できあがった後魚道に本来の水量を流すと、わあっと歓声が上がりました。



生き物が隠れたり棲んだりできるように
願いを込めて石を配置する子どもたち (2012.5.11)



遠賀川河川事務所・河口堰管理支所と連携して
4年生が総合学習で遠賀川について学習

4年生の総合学習では、河口館に行つて遠賀川がどんな川で、どのように利用されているか、河口堰が何のためにあるのか学習します。河口堰や魚道は、河口館から歩いてすぐの場所なので実際に見て学ぶことができます。子どもたちは河口堰の海側は海水なのに上流側は真水で遠賀川がダム
の役割をしていることを知って驚きます。そして海
の魚の鮭(さけ)が川をさかのぼって行って産卵
をすることも知り、自然界の不思議を感じます。
これらの遠賀川の学習内容は、国土交通省遠賀川

新しい魚道を活用した学習



芦屋町町長も参加して鮭を放流 (2013.3.12)

2013年(平成25年)3月12日、1年間遠賀川の学習してきた4年生が、魚道で鮭の放流をしました。このときは、芦屋町の波多野茂丸町長さんも一緒に参加して下さいました。本年度も鮭の放流を行う予定です。
これらの活動は芦屋町広報誌や新聞、テレビニュースなどでも紹介されました。



新しい魚道で生物調査をする4年生



大型水槽で魚道の生き物を育てています

河口堰管理支所の深浦貴之管理係長と担当教師、そのときの担任とで試行錯誤しながら作ってきました。子どもたちの参考になる資料が少ないことから、「遠賀川資料集」を河川環境教育研究会(芦屋町教育委員会、岡垣町教育委員会、北九州市水道局、国土交通省遠賀川河川事務所河口堰管理支所、福岡県北九州市土木整備事務所)で作成しました。
新しい魚道ができあがった現在は、そこで生物調査をして、捕まえた生き物を学校でお世話をして育てています。遠賀川の水質やゴミ問題など学習の範囲も広がってきました。2012年度(平成24年度)これらの活動が認められて福岡県水源の森基金から120cmの大型水槽2台を寄贈していただきました。
遠賀川魚道を、いろいろな生き物に配慮したものにするために、専門家に混じって地域の人や子どもたちも参加してきました。また、毎年魚道を使って学習するようになりました。これらの活動を通して子どもたちが遠賀川を芦屋町の宝物として大切にしていくようになりますと確信しています。



齋藤 勝明

遠賀川下流域
河川環境研究会

遠賀川河口堰の魚道改良完成に寄せて

わたしが、小学生時代、まだ、筑豊炭田の石炭産業が盛んで、遠賀川には、石炭を洗った黒い水が流れ込み、遠賀川は、「ぜんざい川」と呼ばれるくらい黒くよごれていました。

それでも、今より、水質がよくいろんな種類の川魚が泳いでいたのを覚えています。

川に入り手づかみで魚を捕まえたり、フナやコイヤウなぎつりなどをよくしていました。

水巻町に伊左座いぜきがあり、夏場はそこで、友達と川遊びをよくしました。当時、伊左座いぜきまでは、汽水性でボラやハゼなど海の魚のフグもよく捕れていました。

その頃、秋になると、時折、水巻の立屋敷や伊左座では、サケも遡上してきたようです。

今回、河口堰に多自然の魚道が計画され、その懇談会にも、参加させていただきました。

遠賀川流域で暮らす一人の住民の立場と教員の立場で、いくつかの意見を言わせてもらいました。汽水性の魚や生き物が自由に遡上できる魚道として、神様のつかいであるサケが今まで以上に遡上できることを願って意見を言わせていただきました。

また、遠賀川で、子どもたちが楽しく魚や生き物の観察ができる場所として、活用できるいくつかの意見を言わせていただきました。

ようやく遠賀川河口堰の魚道改良が無事終わりました。海と川を結ぶ夢のような魚道です。海と川を行き来する魚や生物にとってすてきなプレゼントになったことと思います。あわせて、遠賀川流域で学ぶ子どもたちにとっては、生き物や環境を体験的に学ぶ夢のような場所でもあります。

「母なる川、遠賀川」とともに暮らしているわたしたちにとってこの場所は、かけがえのない場所になると思います。

子どもたちの元気な声が響きあい、笑顔を交し合えるような「魚道公園」にみんなの力でしていきたいら幸いです。

わたしも遠賀川下流域河川環境研究会会員として、微力ながら活動が続けていきたいと思えます。



辰本 卓

企画部 防災対策官
元・遠賀川河川事務所
技術副所長
多自然魚道プロジェクト
2012年～2013年

遠賀川河口堰の魚道は、平成12年（2000年）の遠賀川工事事務所調査課長時代に旧魚道に加え、第二魚道をなんとか建設できないものかと調査課と当時の河川環境課河崎係長とでいろいろと策を考え、一度、整備局に要求に行ったことが思い出されます。旧魚道は、堰建設当時、当初の計画にはありませんでしたが、計画設計をしていた担当者がここで魚道をつくらなければ遠賀川には二度と魚が昇らなくなると思い計画を変更し設置することができたと思いい計画を修正して岩見さんから伺いました。それであれば、第二の魚道は我々の時代になんとか造らなければと思っていたところでした。結局、当時の要求はかきませんでしたがそれでも河口堰直下の魚類調査をもう少し詳しく行って引き続き要求したいと事務所で検討していました。

今回、自然再生事業として平成20年（2008年）から取り組むことができ、汽水域での多自然魚道として完成することが出来たことは河口堰建設以来携わってきた職員一同の思いがやっと実現出来たことでもありがたく感じています。完成した多自然魚道はとても緩やかな流れを再現し、小さな魚たちが昇り下りでき先生方からは汽水域を好む魚たちがこの魚道を生息の場所として産卵までできていると伺い、とてもいい魚道ができていると感じています。

私たち河川管理者としては、堰左岸の高水敷を洪水から守ることも重要です。今回の工事区間においてははもともと設置してあった高水敷の保護コンクリートを撤去しそのコンクリート殻を再利用して地表面下部に保護工として設置しており完成した現在では見ることはできませんが、高水敷の保護として十分機能を果たしています。

景観・利活用については、九州工業大学伊東准教授のご指導のもと芦屋町や地元の皆様、小学生の生徒さんたちといろいろとワークショップ等を重ね遠賀川魚道公園として完成し大変感謝しているところです。これからは、環境学習やいろいろな行事等での利活用が充実されるよう取り組んでいかなければならないと思っております。

これまで携わっていただいた皆様のおかげでグッドデザイン賞まで受賞したことは改めて関係者皆様に感謝するところですが、遠賀川多自然魚道での整備方法は遠賀川管内の他の魚道の整備・改良にも参考にしていきたいことと、他の河川においても参考にされよりよい魚道整備につながればと期待しているところです。



山口 英彦

河川部 地域河川課長
元・遠賀川河川事務所
技術副所長
多自然魚道プロジェクト
2008年～2011年

私は遠賀川が大好きです。今は亡き父から授かった「英彦」という名前が縁なのか？私は遠賀川河川事務所に比較的長く（10年間）勤務させて頂いたこともあり、遠賀川流域は私にとって第二の故郷になっています。

技術副所長で赴任した平成19年度（2007年度）の冬、「ようやく遠賀川河口堰の魚道改良というのを世の中に発信できる自然・社会環境が整ったので」と、事務所の熱い想いを持っている職員と一緒に「平成20年度（2008年度）の予算要求で遠賀川河口堰魚道改良事業を要求しよう！」という意志決定をしました。

長年の流域の夢であり、「遠賀川に鮭を呼び戻す会」の大里叶さんの遺言だった遠賀川河口堰魚道改良事業は、神様のお導きなのか？天国の大里さんのご支援なのか？予想以上にスムーズに事業採択を頂き、平成20年度（2008年度）より事業に着手することができました。

また、学識者や流域で様々な立場の方々に参画頂きご意見を頂ける懇談会を設置して、貴重なご指導・ご意見を賜りました。特に、九州工業大学伊東先生には事業の最初から完成、維持管理やモニタリングにまで現在もご指導を頂いています。

私をはじめ担当職員は、途中、困難な事柄が悩みにも悩んだこともありましたが、出来上がった魚道や干潟を見て、この事業は多くの方々の想いと

努力がなければ出来なかったものと改めて痛感しました。

今後も魚の遡上や生息環境はもちろん、芦屋町民の皆様をはじめ流域内外の方々が、ここを訪れると心が穏やかになる公園として利用して頂き、次世代の方々へ想いと施設を引き継いで頂きたいと願っています。

さらに、関係の皆様には、今後も順応的管理により、必要に応じて施設の改良など、柔軟に対応して頂ければ幸いです。

お世話になりました関係の皆様方へ改めてお礼を申し上げますと共に、グッドデザイン賞受賞に対して一言お祝いの気持ちを書かせて頂きます。ありがとうございました。



石坪 昭二

遠賀川河川事務所
河川環境課長
多自然魚道プロジェクト
2011年〜

遠賀川流域の皆様方の想いが募った、遠賀川河口堰多自然魚道（遠賀川魚道公園）が平成25年（2013年）6月6日に共用開始しました。私は、平成23年度（2011年度）より本事業に係わらせて頂きました。遠賀川の中流域で生まれ育った私は、遠賀川に対する愛着を大変強く持っており、そんな私が、今回のようなプロジェクトに参加できたのも、何かの縁だと深く感じております。本事業では、学識者・地域住民・小学校児童・九州工業大学そして行政などと多くの皆様のご協力とご支援を受けて完成致しました。平成25年度（2013年度）には、グッドデザイン賞の受賞も受け全国にも紹介されたことは、遠賀川河口堰多自然魚道（遠賀川魚道公園）、そして遠賀川を広くPR出来たのではないかと思います。これからは、地域や遠賀川流域の方々に親しまれ、海と遠賀川を繋ぐ玄関口として上下流を結び、遠賀川のシンボルとして愛されることを期待します。



松永 泰裕

企画部 建設専門官
元・遠賀川河川事務所
河川環境課長
多自然魚道プロジェクト
2009年〜2010年

平成21年（2009年）から22年（2010年）までの2年間の短い期間ではありますが、プロジェクトに関わる皆様にご迷惑をお掛けしながら何とか役割の一端を担う事が出来たと思っております。特に印象深かったのは、ワークショップで、子供も参加して世代を超えた色々な意見交換を行いながら、より良いもの作りへの1歩が踏み出せたのがステキだったと思っております。色々な思いと、知恵と技術が合わさった、良い作品が、多くの人の目にとまり何かを感じ取って頂ければと思います。



吉永 勝彦

遠賀川河川事務所
河口堰管理支所長
多自然魚道プロジェクト
2013年〜

私はこの魚道公園の計画・設計に携わってはいません。もちろん懇談会やワークショップもです。赴任して施工に関わったのも魚道公園仕上げの一ヶ月。

完成した魚道公園と魚道についての説明や広報の仕事がはじまりましたが、最初は作り上げてきた方々との思い入れの違いは大きかったと思います。

しかし、工事が終わって最初の夏、今後の管理の仕方を話し合っている間にも、雑草は伸び、水不足で芝はカラカラ、ゴミも……。これでもいいのかと、みんなで芝への水まきや公園の草取り、ゴミ集めなどをはじめ、夏の日課みたいでしたが、だんだんと気になってしかたがなかった様な気がします。

この魚道公園を作ってきた方々と、これから見守っていく人たちの思いの大きさは同じです。

これからいろいろな人たちに、もちろん川と海を行き来する魚にも、ずっと活用されていくように考えていきます。特に子供達には、この魚道と魚道公園をきっかけにして、環境や生物の学習、また魚の採り方も学んで川に親しんでほしいと思っています。もちろんその次の世代にも。



伴 和美

大隈河川国道事務所
河川管理課長
元・遠賀川河川事務所
河口堰管理支所長
多自然魚道プロジェクト
2011年〜2012年

人と魚類の安全対策

(河川管理施設を管理する観点から)

優れた魚道(公園)を整備しても、何らかの水難事故等が発生してはその価値は台無しとなる。

また、魚道を利用して上流へ上って行く魚類が人間に(悪意の有るなしに拘わらず)、いとも簡単に捕獲されては整備目的の本末転倒である(主役は魚類)。

その点から、支所として以下の整備を主張した。

- ① 魚道廻りへの転落(侵入)防止柵設置(人と魚類の安全)
- ② 魚道内(水深が深い下流側)に、誤って人が落水した時に掴むことができる溺れ防止ロープ設置(人の安全)

必要性については異論も多く出されたが、議論の結果、管理瑕疵等を未然に防止する対策として、転落(侵入)防止柵等が設置されることになったことは「河川管理施設」を管理する側として望ましい形にできた。

施設整備は完成が終わりではない。

今後は長期間にわたり魚類が魚道を快適に利用できるよう、また、人々の憩いの場となるよう、適切な施設管理を継続実施していく工夫が必要である。



河崎 信子

遠賀川河川事務所調査課
元・遠賀川河川事務所
河川環境課 上席専門職
多自然魚道プロジェクト
2008年〜2011年

筑豊で生まれ育ち、長く遠賀川の水環境に係わってきた私が、このプロジェクトの予算要求から工事着工まで主担当として従事させていただいたことは、少し大げさですが、「天啓」と思えるほどに大変幸せでした。

遠賀川の水がまだ真つ黒だった頃に計画された河口堰は、魚道が設置されているものの、海への唯一の出入口としては課題も多く、総合的な魚道機能向上が必要でした。なかでも魚道改築を強く願っておられた「遠賀川に鮭を呼び戻す会」の大里叶氏は、平成15年(2003年)に亡くなる直前にも入院先から私に電話され、「頼むよ。」と託されたのが最後の会話となりました。

その後、河口堰建設から約30年を経て、アユが遡上するほど遠賀川の水質も改善し、住民団体の熱心な河川環境保全の活動、また魚道技術の進展等から、ようやく河口堰魚道改築を予算化できる環境が整い、遂に平成20年度(2008年度)からプロジェクトが始まりました。それからの5年間、懇談会、ワークショップ等々、プロジェクト推進に携わってきましたが、流域の人々の遠賀川への熱い想い、わけても故大里氏の想いを常に背中に感じ、最高のものを造るぞと全速力で走ってきたように思います。

平成25年(2013年)6月、九工大の伊東先生をはじめ、現場や多方面の方々のご尽力で全国



2009年10月第1回子どもワークショップ
魚道模型を説明する筆者

でも類を見ない汽水干潟を再現した多自然魚道を完成させていただきました。公園としてグッドデザイン賞の受賞、また魚道として魚類の先生達からも多様性が回復していると太鼓判を押していただき、本当に嬉しく、国交省河川技官として冥利に尽きる思いです。

この幸せな仕事を思い出し、まもなく定年を迎えますが、皆様方には大変お世話になりました。今後とも地域の宝、流域の宝としてさらに成長、発展していくよう大切に守り、育てていただけたいものと存じます。有り難うございました。



中嶋将之

遠賀川河川事務所
河川環境課専門員
多自然魚道プロジェクト
2013年〜

遠賀川河口堰魚道改良事業については、平成19年度（2007年度）から平成20年度（2008年度）の2年間、管理課管理第二係長時代に係わらせて頂きました。平成20年度（2008年度）の予算要求時は、ほとんど準備をしないまま本局に出向き、説明資料が全くないので当時の本局河川管理課担当補佐から「お前らは本当に魚道を整備しようと思っているのか！」と一喝されました。それから毎週本局に出向き、本局河川管理課の補佐、係長、担当と打合せを重ねながら予算要求資料を作成していきました。このような苦労もあって平成20年度（2008年度）より事業に着手することができ、個人的には当時の本局担当の方々に本当にお世話になりました。

平成20年度（2008年度）に3回の懇談会を開催し、目標・基本構想等ができていく中で担当を外れることになりましたが、平成25年度（2013年度）、遠賀川河川事務所に戻ることになり、一変した河口堰魚道を見たときには驚きました。

現在、魚類等調査結果では、底生魚等の産卵も確認しており、遡上降下の経路としての機能だけでなく、生物の生息・生育環境にもなってきているものと考えています。

今後は「川と海をつなぎ、魚たちがのびりやすく、生き物も人も集う魚道」として効果が持続できるよう、必要に応じ、施設改良や利活用等を考えていかなければならないと思っております。



松本秀一

河川部水災害予報センター
水防企画係長
元：遠賀川河川事務所
管理課管理第二係長
多自然魚道プロジェクト
2009年〜2010年

私は平成21〜22年度（2009〜2010年度）に本プロジェクトの予算要求、事業評価、設計等を担当させていただきました。

本プロジェクトでは、遠賀川に汽水域を復元させ、それまでコンクリートで覆われていた河川敷を地域の方々もっと利活用いただけるよう整備する事を目標に九工大の伊東先生をはじめ様々な方々のご意見をいただき設計を進めることができました。

中でも地域の方々とのワークショップでは、大人だけでなく小学生も交え整備内容や利活用に向け活発に議論させていただき、このプロジェクトに対する地域の期待を直に感じる事ができる大変有意義なものでした。

魚道の事業は完了しましたが、これから長い年月をかけ潮の干満や時には洪水による影響を受け魚道の機能や景観が完成していくものだと考えています。

これから地域、流域の方々に親しまれ、遠賀川の海の玄関口としての魚道が完成していくことを期待しています。



梅田真吾

河川部 河川環境課
流水管理係長
元：遠賀川河川事務所
河川環境課 河川環境係長
多自然魚道プロジェクト
2011年～2012年

当時（2011～2012年度）、私は、遠賀川河川事務所の係長として、様々な立場の方々から頂いた意見等を調整しながら予算を確保し、計画・設計を進めていく立場で魚道プロジェクトに携わりました。はじめは、予算確保が困難で、事業がうまく進みませんでした。「良いものを作る」ために知恵を絞り、コスト縮減を図りつつ、なんとか多自然魚道を完成させることができました。その後、私は転勤となり、プロジェクトの最後まで携わることができませんでしたが、グッドデザイン賞を受賞したという知らせが届いた時、これまでの苦勞が報われたようで、正直ホッとしました。関係者の皆様に深く感謝しております。ありがとうございました。

河口堰の魚道は一応完成しましたが、遠賀川には、いまだに魚がのぼれない河川横断工造物が数多く残っており、魚が棲みにくい環境となっています。私は、今後より一層、「魚が棲みやすい川づくり」が推進し、遠賀川の自然再生が図られていくことを心より願っております。



深浦貴之

国営海の中道浜公園 事務所
工務課 工務係長
元：遠賀川河川事務所
河口堰管理支所 管理係長
多自然魚道プロジェクト
2009年～2013年

私は、以前、遠賀川河川事務所河川環境課に勤務しており、河川環境全般の仕事をしていました。そして、2009年、8年ぶりに遠賀川に戻ってきて、この魚道改良事業に携わる事になり、「サケの倍かかって帰ってきてサケのための魚道づくりをやるのか」と思ったのを思い出します。

プロジェクト2年目の実施設計から携わると言うことで、「非常に重要な時期に来たな」と感じました。

現場で円滑に工事を進める上では、施工方法や材料の選定を実施設計時に十分に検討しておかないと工事が円滑に進まないのです。今回の工事においてもすべてが順調に進んだということはなく、仮設方法や材料の選定等、多くの項目についてギリギリまで調整したのを思い出します。

このプロジェクトが成功した理由はいくつかありますが、最大の理由は、流域や地元住民皆様の想いやプロジェクトの意義を懇談会・ワークショップなどを通じて関わったすべての方々で共有し、進めることができたからだと思います。

また、時間がない中、現場に来て頂き直接、施工業者に指導して頂いた伊東准教授やその想いを受け止めて良い現場を残したいという施工業者の方々の職人魂も忘れてはならない。この魚道は、流域の多くの方々の想いが形になり、一つの夢が叶ったものなのです。

最後になりますが、この魚道は、遠賀川と海とを繋ぐ唯一の場所であり、生まれたばかりです。流域全体が一丸となり、この魚道公園を見守っていき次世代に繋げていくことがこれからの使命となります。多くの方々にこの公園を訪れて頂き、一つでも多くの思い出を心に残して頂けたら幸いです。



柴田 みゆき

久留米市 総合政策部
総合政策課
元・遠賀川河川事務所
河川環境課
多自然魚道プロジェクト
2011年～2013年

私が遠賀川魚道公園の現場に携わったのは、公園が概成する直前の頃で、初めて施工現場にいったときはすでに魚道の形はできあがっていました。やわらかな曲線を描いた魚道が河口堰の横にあることは、本当に不思議な感覚でした。私が知っている堰近くにある魚道は階段状になっていてコンクリートでがっちがちのものだったので目が点になるってこんなことなんだろうなあと思いついた。高さや設計力等に驚かされました。さらに完成予定図を見ると、普通の住宅団地そばにあるような公園とは違い、生き物と人が自然にふれあえる場所にしてくれる他に例が無いオンリーワンの公園だと感銘をうけました。だからこそそんな遠賀川魚道公園の完成予定図を作成するまでには、いろんな人達の思いがあつてそれを1つにまとめるまでにもすごく骨がおれる苦労をしたことだろうと瞬時に思い、それと同時にその苦労を無駄にしないように公園を完成させなければならぬというプレッシャーも正直すごく自分にのしかかりました。

いざプロジェクトに携わってみると、人が集うことを考えると安全面もしっかり配慮するゆえ景観だけを考えるわけにはいかないし、魚道公園なのだからただでなく生き物のためにもよい空間を考えなければならぬし、そして尚且つ現場施工可能なものでないとそもそもダメだし・・・と

いろいろな中々一筋縄ではいかないことも多々ありました。ですが、遠賀川魚道公園が概成したときは、ふっとした安堵と共にまた一つ自分のステツプアップになったなと湧き上がるような沸々とした嬉しさが込められました。そして遠賀川魚道公園をよりよいものにするため色んな案を出す人達・そんな多くの案をまとめ設計する人達・現場でその設計を形にする人達、それを総合的な目でみてアドバイスをくれる専門家の人達と多くの人達のチーム力で遠賀川魚道公園があると信じますが、そのチームの一員でいられたことに本当に幸せを感じました。

いろんな人達の思いが詰まった遠賀川魚道公園は、憩いある空間としてこれからも愛され活用され続けて欲しいと思います。

北野 真広 岩谷 将徳
 星博 嶋田 智行
 坪井 隆一

八千代エンジニアリング株式会社

私たち八千代エンジニアリング株式会社は、平成20年度（2008年度）から平成21年度（2009年度）の2カ年にわたり、遠賀川魚道公園の計画・設計やこれに関わる地域住民の方々とのワークショップ運営に携わりました。

当時の思い出として印象に残っていることは、ワークショップのイベントで地元の子供たちと一緒に既設魚道に入って泥だらけになりながら魚採りをしたことです。旧魚道は、大人の背丈以上のコンクリート壁に囲まれているため、子供たちが脚立を使って降りる際に滑ったりしないか、魚道内の濁水の中にガラス瓶などの危険物がいないかを確認したりと、子供たちの安全管理に非常に神経をとがらせていたことが思い出されます。いま、出来上がった魚道公園の水辺で楽しそうに遊んでいる子供たちを見ると、当時の心配が嘘のようで、このような施設づくりに携われたことに喜びと誇りを感じています。

これまで河川に無関心だった人々の興味を身近な地域の川や水辺に集めることが、より良い川づくりへの第一歩だと思えます。ワークショップに参加した子供たちにとって、また、現在やこれから魚道公園を訪れる子供たちや親御さんにとって、魚道公園で遊んだことが良い思い出として記憶に残り、地域の河川や水辺への関心を少しでも高めることができたなら、魚道公園の計画・設計に携



子どもワークショップにて（2009.10.31）

わった者として、これほどの喜びはありません。

繋ぐということ



和泉 大作

株式会社
 建設技術研究所
 九州支社 環境・都市室

私は本プロジェクトに平成22年〜23年（2010〜2011年）の2カ年をコンサルタント業務の責任者として関わりました。また本事業と並行して遠賀川の河川と水田をつなぐプロジェクトにも関わっておりまして、「これで本当に海から水田まで一連で繋ぐ事が出来るんだなあ」と感慨深い気持ちになりました。

今回の設計で苦労したことは、現場の一部が動いていきましたので施工しながら設計の見直しをする「現場合わせ」が何度かありました。ワークショップでも現場見学を行いながら、斜面の勾配や子供達への安全対策など机上だけでは分からないことが、多くの人の目でみて修正設計ができました。あわせて、各種会議などで多様な関係者を1つの目的に向かうために繋ぐヒューマンネットワークも実現できたと思います。

これにより魚類を遡上させるだけの魚道から、自然と人を繋ぐ魚道公園が実現できたと思えます。今回のプロジェクトでは伊東先生にはずいぶん助けて頂きましたし、多くの学生さんにも関わって頂きました。私たちコンサルタントは事業者、施工者、住民を繋ぐツールを作る仕事です。私たちの成果が技術者を目指す学生さんや遊びに来てくれる子供達に何か気づきを与え、彼らの未来への

夢を繋ぐことが出来たのであれば大変嬉しく思います。本事業に関われたことをたいへん誇りに思います。



平成 23 年度 第 2 回ワークショップ
(2012.2.24)



現地見学会 (2011.10.19)



豊國 法文

株式会社
建設環境研究所

プロジェクトに関する思い出

グッドデザイン賞の受賞に際しまして、九州工業大学伊東先生を始め研究室の皆様、関係された多くの方々にお祝いを申し上げますと共に、少しでもこのプロジェクトのお仲間に入れて頂いたことに深く申し上げます。

私がこのプロジェクトに係った時期は平成 24 年度（2012 年度）のみですが、工事完了を前にしての細部の仕様にわたる熱心な協議の状況、意見交換内容を鑑みますと、関係者の方々のプロジェクトに対する強いこだわりや思いをこれほど深く感じた業務はありませんでした。

供用開始を前にしての安全な利用促進を目的とする施設整備に関しては、様々なお考えの基、多くの意見協議が行われた他、干潟の形状や石ひとつの置き方、公園の名称決定のプロセスや地域の方々を招いての植樹イベントの開催等、まさに賞をもらうにふさわしいプロジェクトであったものと思ひ出されます。

これからも自然再生の目的の基、新たな魚道には鮭が遡上し、周りには子ども達の歓声が響き、多くの地域の方々が散策する公園の情景を眼に浮かべながら、関係者の方々と共に更なる推進継続に係っていききたいと思ひます。



植樹祭にて (2013.2.26)



2012 年度ワークショップ (2012.10.26)



掲野 慎一郎

九州工業大学
環境デザイン研究室
修士2年

2011年12月、研究室に配属されて、一番始めに取り組ませていただいたプロジェクトが「遠賀川多自然魚道プロジェクト」でした。当時、プロジェクトでは魚道公園内のスロープ、階段についての模型づくり、公園内に設置するサインについての検討を行っていました。研究室に配属される前にも、伊東先生の講義の中で何度か紹介された遠賀川多自然魚道プロジェクトについては知っていたのですが、スロープ階段についての模型づくりやサインの検討などを手伝わせていただきながら、本当に自分たちが設計・計画したものが形になっていくんだということに強く衝撃を受けた記憶があります。

それから3年間、遠賀川多自然魚道プロジェクトに関わらせてもらいながら、1年目は子どもたちと一緒に魚道内に石を配置していく「石並べワークショップ」やサイン計画や柵の検討、河口干潟の工事、2年目からは魚道公園の供用が開始されたため、公開シンポジウムや草地管理計画の提案、構想から供用までをまとめる「遠賀川多自然魚道プロジェクトブック」の編集など、さまざまなことに携わらせていただき、実際に土木構造物がどのように作られているのか、また、その背景にはどれだけの方々の思いや苦労が込められているのかなど本当に多くのことを学ばせてもらいました。その中で強く感じたのは、遠賀川魚道公園が本当

にたくさんの方々の思いが詰まった場所であるということ。私たちが提案する基本計画を実際に施行できるように図面などに落とし込んでいく建設コンサルタントの皆様、マネジメントや事業主体の役割を担う国土交通省遠賀川河川事務所の皆様、今後公園の維持管理をしていただく芦屋町の職員の皆様、ワークショップにも参加して協働で設計いただいた、また、今後は魚道を一番活用してくださるであろう住民の皆様、計画や設計に携わってきた僕たちを含めた大学や学識経験者の皆様など。本当にたくさんの方々の思いによってあの場所が出来ているのだと思うと、その思いの大きさから、本当に身の引き締まる想いです。今後、今まで関わってこられた方々の思いを無駄にしないためにも、あの場所がどのように地域に根付いた場所となっていくのかしっかりと見届ける必要があると思います。



始めて製作した模型写真

供用が開始され、2年が経とうとしています。今後、あの場所がどのような場所になっていくのでしょうか。本文章を執筆するにあたり、私が携わってきた3年間の写真をあらためて振り返ると、仕事があったにしろ本当にさまざまに変化を感じることによって良いようにも悪いようにも、さまざまに変化していくと考えられます。本当にたくさんの方々の思いが詰まった場所だからこそ、その思いを無駄にせず、地域に根付いた本当に良い場所にしていくためには、どのように活用していけばいいのか、地域の皆様や遠賀川河川事務所の皆様、また、先生や研究室のメンバーとともに考えていければと思います。残り学生生活もあとわずかとなりましたが、たくさんの方々の事を学ばせていただいた魚道公園に恩返しが出来ると、しっかりとプロジェクトに取り組んでいきたいと思っています。



魚の遡上を考えた環境づくりワークショップにて
(2012.5.11)



伊藤 拓也

九州工業大学
環境デザイン研究室
修士2年

僕は山口県の田舎で生まれ、小学生の頃は田んぼや山の中で遊びながら育ってきました。大学に入学し、学年が上がるにつれて山口に帰ることも少なくなってきました。それでも、たまに山口に帰ると、実家の周りの景色や匂いの変わらなさに驚き、懐かしい気持ちになります。

僕が大学で環境デザイン研究室に配属されて、初めて遠賀川魚道公園に行ったのは、2012年5月の魚道改良ワークショップの時です。その頃には遠賀川魚道公園の形はほとんど完成していて、つい最近までこの場所がコンクリートに覆われていたということ信じられませんでした。

その後、本格的に遠賀川多自然魚道プロジェクトに関わるようになりました。僕が最初にやらせていただいた大きな仕事は、現在公園内に立てられている設計プロセスサイン・公園内案内サインのデザインでした。どちらのサインにしても、載せる文言や写真、イラストについて、伊東先生や河川事務所の方々、建設環境研究所の方々や打ち合わせを何度も繰り返しながらつくっていったことを今でも覚えています。サインが完成し、公園に実物が立てられたのは2013年の3月でした。その後、公園へ魚類調査や植生調査に行ったとき、2つのサインを眺めている人がいると、何ともいえない嬉しい気持ちになります。

プロジェクトに深く関わるようになればなるほど、

ど、5年間という長い時間の中で、多くの人の想いがあったこの公園ができてきたということを感じます。しかし、公園内で地域の人とお話をする中で、遠賀川魚道公園がつくられてきたプロセスやその背景を知っている人があまりいないということも分かってきます。僕は、この公園がつけられるまでのプロセスや、この公園が持つ魅力を全て把握できているわけではありません。それでも、多くの人にこのプロジェクトやこの公園に対する興味を、少しでも持ってもらいたかったと思っています。僕が携わらせていただいた設計プロセスサイン・公園内案内サインのデザイン、またグッドデザイン賞への応募によって、少しでもこのプロジェクトについて、多くの人々に伝えることができたら嬉しいです。

この遠賀川魚道公園が目指すものは「地域に根付いた公園」です。これから、公園の周りに住む地域の人々にこの公園についてもっと知ってもらい、使ってもらうことで、この公園が地域に根付いたものに育って欲しいと思います。そして、これからこの公園で遊びながら育っていく子どもたちが、将来この公園に懐かしさを感じてくれるようになればと願います。

2013年に遠賀川魚道公園は完成しましたが、草地管理や利活用について、またマネジメント体制についてなど、課題は多いと思います。これまでにプロジェクトに関わってこられた多くの方々への想いをつなぎ、生き物にとっても人にとっても魅力的な公園としていくためにはどうしたらよいのでしょうか。このプロジェクトとこの公園をさらに未来へとつないでいくために、考えていきたいと思っています。



遠賀川魚道公園完成シンポジウムにて (2013.6.8)



設計プロセスサインと公園内案内サイン



須藤 朋美

九州工業大学
環境デザイン研究室
修士2年

遠賀川魚道公園での活動で最も印象的なのは、2013年の6月に子どもたちと生物調査をしたことです。活動の初めに、測上先生から生き物の探し方や道具の説明がありましたが、集まった子どもたちは早く魚道に入りたくて、話を聞くところではない様子でした。先生からゴーサインが出ると、思い思いに道具を手にとって、魚道にかけていき、魚を探します。でも、なかなか見つからない。網で水をすくうだけでは、生き物は捕まえられません。しばらくそんな状況が続くと、子どもたちも、だんだんと先生や大学生の話に耳を傾けるようになります。ここで私たちは、石を動かしてみたり、泥や砂利も一緒に網ですくってみたりして、一緒に生き物を捕まえてみせます。次は、自分ひとりですくってみます。一度自分でできるようになると、あとはもう早いもので、またそれぞれが魚道の中に散っていきます。「カニおつたー!」「こっちの魚の方が大きいばい!」と、子どもたちの発見の音がたくさん聞こえるようになります。男の子たちは、大きさを競って、必死で水の中を観察します。水面を這うようにして、顔を水に近づけ、服が濡れることなどお構いなしです。生き物を見ても「気持ち悪い」と言っ

て水にも入りたがらなかったある女の子も、自分で力二を捕まえてからは、水に入るようになり、捕まえた生き物を自分の手に持って、お母さんに

見せていました。そうして、用意されていた水槽に、たくさん生き物が集まりました。捕まえた生き物は、最後に魚道に返しました。中には、「持って帰る!」と言って、お母さんやお父さんを困らせている子もいました。

このような体験活動では、大学生や大人がいると、そこに興味が行ってしまつて、学習や体験に意識が向かないこともあるのですが、今回は大学生や大人そっちのけで生き物を探す子どもたちばかりでした。こんなふうになつていく子どもたちの姿をみると、実際に水に入ったり、自分で捕まえたり、生物に触ったりといった体験が、いかに子どもたちに魅力的であるかがわかると思います。生物の名前や、生態系の話はとも大切ですが、このような体験の上で新たに情報を伝えることで、少し難しい話でも、子どもたちは興味を持って聞くことができます。遠賀川魚道公園には、子どもたちが楽しく遊び、学びのきっかけとなる生きた教材にあふれていると思います。実際には、安全面等の難しい課題もありますが、多くの子どもたちがこの遠賀川魚道公園での思い出を作れるようになればいいなあ、と思います。



平川 豊晃

九州工業大学
環境デザイン研究室
修士2年

環境デザイン研究室に配属され、魚道を初めて訪れたとき、魚道は改修工事が行われている最中でした。コンクリート護岸が剥がされ、新たな魚道の形がうっすらわかるようになっていました。この時、研究室の先輩方で設計したものが実際に施工され、形になるということに感動したことを今でも覚えています。

これまで遠賀川魚道公園プロジェクトには、ワークショップやシンポジウム、植生調査などで関わってきました。子どもたちが、魚を放流したり、河床に石を配置するといったワークショップに参加し、私も魚の住みやすい場所を作るためにはどうすればいいのか学ぶことができました。また、植生調査では、多くの植物を見ることができて楽しかったのですが、炎天下の中真っ黒に日焼けし、とてもきつかったといった思い出にもなっています。

今後もワークショップや調査等で関わることになると思いますが、ワークショップや管理を通して、多くの生物が生息し、たくさんの人々が訪れる場所になって欲しいと思います。



田中優太

九州工業大学
環境デザイン研究室
修士1年

私は2013年度より遠賀川多自然魚道プロジェクトに携わらせていただきました。特に遠賀川魚道公園は僕が研究の対象地として利用させていただいている場所であり、私にとって特に思い入れの強い場所です。まだ完成していない2013年の4月から毎月調査などで遠賀川魚道公園の様子を見てきました。春から秋にかけて様々な植物が魚道公園を覆い、多自然魚道にはハゼやウナギなど多くの魚類や甲殻類が生息しているのを確認できました。調査では、実際に植物を観察したり、生物の採集したりと、遠賀川魚道公園の生態系にとっても身近に触れることができました。

遠賀川多自然魚道ができたことにより現在では様々な魚類や甲殻類が多自然魚道を利用している、草地ではバッタやチョウなどが移動しているところを目にすることができますがこれで完成ではないと思います。まだ手を加えるべき場所はたくさん残っていると思います。今後この場所が自然再生のモデルとなるよう、様々な生物や植物が生息できる多自然魚道を目指し維持管理計画を行ってまいります。

また、現在魚道公園は、バードウォッチングやサイクリング、散歩などで利用されていますが、さらに魚道公園が地域に親しまれ、使ってもらえるような公園を目指し、残りの大学生活の中で、積極的にプロジェクトに携わってまいります。



山下絢子

九州工業大学
環境デザイン研究室
修士1年

私が2013年、はじめて魚道公園へ訪れた時、改修工事はまだ完了していませんでした。植物も生えておらず、どのような空間になるのかあまり想像が付きませんでした。その後、6月のオープンニングシンポジウムでは、芝が吹きつけられ、魚道沿いに植生も繁茂し始めていて、少しずつ「多自然型」というイメージが現実にあらわれてきました。魚道で魚が泳いでいる姿もみることができて、純粋に感動しました。

しかし、対岸や上流側へ行くと、魚道公園とは全く雰囲気の異なる、コンクリートで固められた河川敷が多くみられます。このような環境のなかで、魚道公園は、遡上する魚やその魚を食べる生き物、繁茂する植物などにとってまちなかの貴重な生息・生育環境であると同時に、魚道公園に訪れた人々が自然と触れ合うことのできる身近で大切な場所になってほしいと思いました。また、人と自然環境とのつながりをつくるだけではなく、地域の方々に積極的に活用していただき、地域の交流の場としても盛り上がりをもたせたいと思います。そのような将来像を考えながら、これからの2年間、魚道公園プロジェクトに関わってまいります。



川添祐

九州工業大学
環境デザイン研究室
修士1年

私が初めて遠賀川魚道公園を訪れたのは、研究室に配属が決まった頃でした。写真では施工前の様子と施工後の様子を見ていたのですが、実際に訪れた時は、その規模の大きさに驚いたことを覚えています。その後何度か遠賀川魚道公園を訪れる機会があり、実際に利用している方々を見ると、この場所が単に様々な生き物が生息できる空間ではなく、利用者にとっても快適に利用できるような空間であることが分かりました。

また、完成シンポジウムでは子ども達は生き物調査を行い、様々な生き物を見つけました。以前のこの場所ではそういった活動や子ども達の姿は見る事ができなかったと思います。子ども達の生き生きとした姿を見て、子ども達にとっても身近にこういった空間があることは大切なことなんだなと思いました。

私は現在、北九州市戸畑区の夜宮公園巡り坂池で小学生を対象にワークショップを行なっていますが、地域の方々や子ども達が身近な自然を大切に思ってくれるのは非常に嬉しく思います。遠賀川魚道公園も今後地域の方々や子ども達など多くの人々に利用されるような空間になってほしいと思います。



山田 眞

九州工業大学
環境デザイン研究室
修士1年

私は写真で何度か魚道公園を見たことはありませんでしたが、実際に初めて魚道公園を訪れてみると、そのスケールの大きさにとても驚いたのを覚えています。私は遠賀川魚道公園プロジェクトに関しては、主に植生調査や生物調査の時だけ関わってきました。しかし、完成シンポジウムに参加した時には、国交省の方々から施工業者の方々、地域の方々までたくさんの人たちが参加しているのを見て、このプロジェクトにおける人のつながりというものを非常に感じました。このような大きなプロジェクトを進めるためには、様々な立場の人たちがいろいろな面で携わっているのだと実感した瞬間でした。

今後、遠賀川魚道公園は地域の人々の憩いの場、近隣の小学校の環境学習の場としての活用が望まれています。この遠賀川魚道公園プロジェクトに関わる人たちの輪を広げ、周りの人たちを巻き込んでいくために、新たな活用方法を考えていかななくてはなりません。私は、他のプロジェクトで小学生の環境学習のマネジメントを行っています。遠賀川魚道公園で環境学習を行う際には、少しでも力添えできればと思います。



小田 祐介

九州工業大学
環境デザイン研究室
学部4年

私の実家は魚道公園のある芦屋町からとても近く、高校生のころはよくこの公園近辺まで走りに来ていました。当時は全面コンクリート張りだった場所だったので、遠賀川にこのような心地良い空間ができたことは、地元の人にとってとてもよい環境であり、私自身、とてもうれしく思います。実際に私がこの公園に初めて訪れたのは、先日行われた国際シンポジウムの前日にマーク先生たちと同行したときでした。その日はとても風が強く、寒い日だったと記憶していますが、川に罫をしかけ魚を捕まえたり、鳥の写真を撮ったりしている方がいて、地元の人が公園を活用している姿を見ることができました。また、魚道の生物を確認するために石をひっくり返して確認していたのですが、子供の頃よくしていた磯遊びのような感覚で、とても楽しかったです。

この場所の次の課題として、利活用と維持管理が挙げられています。利活用の部分として、地元の人達にこの公園が広く認知される必要があると思います。そのためには、近くの小学校などに声をかけて、ワークショップを行うことで、多くの人たちにこの公園を知ってもらえると思います。これらの課題を解決していくことで、この公園には地元の人の生活に寄り添い、地域に根づいた場所になってほしいです。



北村 圭佑

九州工業大学
環境デザイン研究室
学部4年

自分が実際に現場へ行って最初に遠賀川魚道公園を見たのは、冬の時期で植物がほとんどない状態で、さびしい状態でしたが、写真などで見たこの公園は多くの植物があり、また魚にとって生活しやすい魚道も作られていて生態系にとってもいい環境が作られていると感じました。この魚道公園の近くの道路は歩道が狭く、近所の方たちが通行するのが大変であると感じました。そこにこの公園の遊歩道があるのは、住民にとってもランニングや散歩がしやすい環境が作られていると感じました。またこの公園のデザインも工夫がされていて歩道のカーブや標識などすべて曲線が用いられていてやわらかい印象を受けました。

この公園はもっと子供が遊びに来れる環境があればいいなと思いました。遊具などが全くなかったので子供たちはあまりこの公園を利用しないんじゃないかと感じました。まだ遠賀川の川沿いはコンクリート張りの場所がほとんどでもっとこの公園のような遊歩道のある場所が増えると住民にとってアクセスしやすい場所になるのではないかとおもいました。



仲松 孝洋

九州工業大学
環境デザイン研究室
学部4年

私は、遠賀川魚道公園に関わらせて頂いたわけではないのですが、一度だけ行かせていただきました。訪れる以前には遠賀川魚道公園について伊東先生の授業で写真を見たり、どのようなコンセプトで改修を行ったかなどの説明を聞いたりしていました。改修前の写真では、コンクリートで覆われていて緑のある場所ではなく、とても人が集まるような場所ではないというような印象を受けました。その後、実際に公園に行ってみると、緑豊かで川をすぐ近くに感じることができ、緩やかな傾斜が思わず歩きたくなるような場所といったような印象を受けました。またその時は、平日の朝方だったのですが、生物を捕まえるための仕掛けを作っている人や野鳥観察に来ている人、魚釣りをしている人、散歩をしている人など様々な活動をしている人がいました。遠賀川魚道公園の会議に参加させていただく機会があり、今後の整備の方向性や地域住民との関わり方などを話されていて、この魚道公園をよりよくするという多くの人の思いがこもっていると実感しました。このような様々な活動をする人が一緒に集まる場所は貴重であるように感じました。今後もこのような活動の場でありながら、様々な人々が集まり交流のできる場であればいいなと思いました。



花田 有里絵

九州工業大学
環境デザイン研究室
学部4年

遠賀川魚道公園を初めて見たときの第一印象として、水辺と人の歩く道の一体感を感じました。私が今までにみてきた公園のほとんどが水辺と人の歩く道との境界がある場合が多く、水辺との遠い距離を感じるものでした。しかし、この遠賀川魚道公園は、水辺に近づいてみたり、離れてみたりできるため、各々の距離感で水辺空間を楽しむことができました。特に小学生などの子供たちは、近づいて生き物を見たり、触ったりしてみたいという好奇心が旺盛だと思えます。そんな子供たちの遊びの場としても利用でき、また、小学生の環境学習として、ワークショップも行えたらいいなと思います。

今後、この公園が市民の人々が散歩したり、写真を撮ったり、絵を書いたり各々の目的によって利用されたり、ときにはイベントを催して地域振興につながるような場としても活用されたりと様々な可能性を持つ公園となって欲しいと思います。個人としては今後、四季における公園の姿がどのように変わっていくのか、ときが経つにつれてどう変化していくのかを楽しんでいきたいです。また、わたしはその空間を楽しむ際に距離感を着目しています。この距離感も時間による変化とともに楽しむ要素のひとつとしたいです。



石松 一仁

九州工業大学
環境デザイン研究室
卒業生

本プロジェクトのおかげで遠賀川河川環境保全モニターの上信好さんの指導を仰ぐ機会に恵まれ、とても勉強になっています。また、調査の度に、捕まえた魚を瞬時に同定する能力や狙った魚を確実に捕まえる技術に驚くと同時に、休憩中におっしゃるジョークに笑っています。

僕は自転車です遠賀川沿いの福岡県道27号や73号を走ることがありますが、上信さんの指導を通して河川生態の知識が少しずつ備わっていくに連れて、遠賀川に対する見方が確実に変化しています。そして、遠賀川流域の生態系サービスの変遷に大変興味を抱くようになりました。もう少しの間、僕は本プロジェクトに携わることができると、これについて研究してみたいと思っています。

最後になりましたが、夏の暑い日も冬の寒い日も、僕らのために貴重なお時間を割いて下さっている上信さん、本当にありがとうございます。魚のことで困ったら、これからも相談させていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。



伊藤 悟

九州工業大学
環境デザイン研究室
卒業生

2013年の完成シンポジウムに参加して、準備の段階から、多くの方が協力しているのを見て、大掛かりなプロジェクトであったことが見て取れました。シンポジウム本番では、「歩きやすくなった」「きれいな景色が見られる」という地域の方々の声が聞かれ、水生生物だけでなく、地域の方にとっても良いプロジェクトであると思いました。また、シンポジウムでは、子どもたちが実際に多自然魚道に入り、水生生物や周りの植物をさわる、匂いを嗅ぐなど、五感を使って遊んでいる姿を見て、地域住民の方に密着できた公園ができたのではないかと思います。

また、この公園は、遊歩道から多自然魚道までの傾斜が緩やかに設計されており、多自然魚道へ簡単に降りることができます。その多自然魚道では、子どもたちを対象に、海が近いという多自然魚道の特徴（汽水域特有の生物相や潮の満ち引きの様子など）を生かした自然体験学習やワークショップを行うことが可能であると思います。そして、知識を聞くだけの学習ではなく、実際に川に入って遊ぶなど、五感を使って子どもたちが楽しみながら学習するといった、体験型の学習を行うことのできる場所であると思いました。



井手 孝亮

九州工業大学
環境デザイン研究室
卒業生

遠賀川河口堰を初めて行ったのは、大学1年生の研修会でした。この時、私は河口堰周辺を見学して「コンクリートブロックに囲まれた施設」という印象を受けました。しかし、この頃の私はこの場所が劇的に変化し、その変化にまさか自分が携われるとは思いませんでした。

その後、私は2011年度に環境デザイン研究室に配属しました。設計や生態系について学びたいと思い、このプロジェクトに関わらせていただきました。私が入ったときは詳細設計の段階で、私は階段・スロープ・植栽提案・展開場・サインといった様々な設計に携わらせていただきました。（正直なところ、このときの私は卒論・院試勉強・他のプロジェクト等、かなり辛い状況でした・・・）建設コンサルタントの方からいただいた図面をもとに、模型を作製しました。また、この場所に合う植栽を検討し、提案しました。他にも、多くの方が分かるようなサインのデザインや色を話し合い、試作品から検討しました。

私たちが考えたことや提案したことが設計に活かされ実際に形になったとき、達成感と興奮を覚えました。話し合いが図面になり、模型になり、竣工される過程に携われたことはとても貴重であり、一生忘れることはありません。学生の頃にこのような経験をできたのは伊東先生を含め、研究室の皆さん、国土交通省の方々、建設コンサルタ

ントの方々のおかげだと思います。2012年には、魚道の線形が出来たので、その場所に芦屋東小学校の子ども達を呼んで、石並べワークショップを行いました。国土交通省の方たちと小学校に行って、事前授業を行い、魚の生態や魚道の必要性を話しました。後日行われたワークショップでは、子ども達や研究室メンバーの楽しそうな表情を見ることができてとても嬉しかったです。今でも鮮明に覚えています。

このプロジェクトに関わらせていただけたことで、途中、辛いことや反省しなければならぬこともありました。しかしながら、この経験は仕事の進め方や設計に対する考え方を学べた貴重な財産です。また、このプロジェクトやこの本の執筆に関われたことを心から感謝しています。この場を借りて、みなさまにお礼を申し上げます。ありがとうございます。ありがとうございました。



ワークショップ後のグループ写真
(2012.5.11)



深町 健太郎

九州工業大学
環境デザイン研究室
卒業生

私は二年間、この遠賀川多自然魚道プロジェクトに関わり、階段のデザインやサインの計画に携わらせていただきました。思い返してみると、大変だった思い出や辛いと感じた思い出、また、嬉しかった思い出など様々な思い出があります。

階段とスロープを造る計画では、詳細を詰めなければならぬので、模型を夜遅く、時には徹夜して製作することもありました。サインの計画でも、デザインの案や色合いがなかなか決まらず、終わりの見えない作業を悩みながら行なうこともあり、体力的に辛く、逃げ出したいと思うこともありました。しかし、実際に完成し、現場を見学した時、悩み、話し合いを重ねてデザインを行なったものが、実物となって目の前に現れていることに、言葉では言い表すことができない嬉しさと達成感がこみ上げてきました。また、完成シンポジウムでは、ともに魚道公園を造り上げてきた人や生まれ変わった空間を楽しみにして来てくれた人など多くの人々が訪れ、良い空間になったと言ってくれた人もいました。

この魚道公園は、多くの人の努力や苦勞、アイデアの積み重ねにより造り上げられたと思います。けれども、現在が完成形ではなく、今後多くの人に関わり、さらに良くなっていく場所になってほしいと思います。



平田 裕之

九州工業大学
環境デザイン研究室
卒業生

研究室に配属になった頃は、遠賀川魚道公園のプロジェクトは施工が始まるころでした。2011年から2013年の2年間で、コンクリートの護岸であった場所が、緑に覆われ、魚道や干潟ができあがり、空間が次々と変化していく過程で、毎回感動していました。昨年の完成シンポジウムでは、子どもたちが水に触れ、魚を捕まえたり、トラップを仕掛けたりする楽しそうな姿を見たり、「またこの公園に來たい」といった声を聞き、親水性のある河川が子ども達に与える影響はとても大きく、重要だと感じました。

小学生の頃、遠賀川の護岸はコンクリートで覆われている場所が多く、釣りをする際はブラックバスばかりが釣れていました。遠賀川魚道公園の効果により、多くの種類の魚や貝、カニ、昆虫などが遠賀川の至る所で見られるようになり、遠賀川中流、上流域で生活している人に影響を与え、より人と河川のつながりが深くなっていくことを期待しています。また、今の子ども達が、10年後、20年後、50年後になっても、この魚道公園に愛着を持ちつづけ、生き物と人と自然のつながりの大切さを次の世代へ伝えてほしいと思います。



富井 俊

九州工業大学
環境デザイン研究室
卒業生

2010年から2012年の春まで、環境デザイン研究室の一員として関わる。この頃は、実施設計が進み、徐々に工事が進んでいった時期だった。これまで多くの方が関わってきたプロジェクトを引き継ぎ、最後のかたちを決定する場面であっただけに、どこかぞくぞくするような心地だった。そのため、今日の前にあるもの、現状をよく見て、どうやったらよりよく出来るか、かたちとして表すことが出来るか、そんなことばかりを日々考えていた。図面を見て、話を聞いて、そういうものだと思ったらそこまでだけど、一つ訊いて、一つわかると可能性が広がり、変えていける、そう思えた。そうして、河川事務所やコンサルタンの方々に、何度も質問や確認を重ね、検討を重ねることで、少しずつ現実のかたちになっていったように思う。

節目を迎えても、まだもっと、と多少もやついた思いを持っていたが、実際に遠賀川魚道公園が出来て、魚があの道を通って、子供達はその姿を見ていて、後輩達がいる写真を見たとき、少しはやれたのかもな、そう思えた。節目はあるけど、終わらせない限り、終わることはあまり無いから、次の誰かがあやって、あの場所ですまないでくれていることが嬉しかった。また今度は、ゆったりビールでも呑みながら話したい。



秦裕二

九州工業大学
環境デザイン研究室
卒業生

遠賀川魚道公園の利用が開始され、本当に嬉しい気持ちで一杯です。また、プロジェクトブック作成にあたり、お声をかけて頂き誠にありがとうございます。

私は大学在学中には、季節・時間を問わず、たまに遠賀川を自転車で走りに行っていました。当時、河口堰周辺はまだコンクリート張りでしたが、川の見える開けた視界や対岸に見える山の稜線が印象的でした。更に、研究室に配属されてからは、遠賀川を対象に研究をさせて頂き、調査・ワークショップ等で訪れる機会も増えていきました。ですので、大学生活の中で、遠賀川は公私共に最も思い入れのある場所の一つです。

さて、私が本プロジェクトで最も記憶に残っているのは、M2の時に階段、看板、樹木、クラックガーデンを設計したことです。まず、条件を整理し、現地に合う植生を調べ、模型による検討を行い、実際に現地調査を行い、打合せ・ワークショップの意見を反映したりと、何度も検討と修正を重ねていきました。勿論、私一人ではなく、プロジェクトメンバーで分担して、時には他の研究室メンバーにも助けをもらうことで、検討を進めることが出来ました。そして、伊東先生にご指導を頂きながら、実際の設計が少しずつ形になっていきました。このように「人」と「生き物」の観点から複数の設計を並行して行い、それを実際に形にする

ることの難しさと喜び、マネジメントの大変さとやりがいをもつて学ぶことが出来たことは、私にとって何よりの財産となりました。

これからの遠賀川魚道公園は、「生きもの」と人をつなぐゆるやかな水辺空間」が実現し、管理者・利用者が一体となって遠賀川魚道公園について考え行動することで、更に良い空間になっていけば、と思っています。また、遠賀川魚道公園が「生きもの」と「人」、その「関係」について考えるきっかけの場となることを願っています。



山本礼子

九州工業大学
環境デザイン研究室
卒業生

グッドデザイン賞受賞、おめでとうございます。プロジェクトが始まった2008年、当時学部4年の時。300mの河口堰魚道をつくるプロジェクトと聞き、その壮大さに伊東先生に「やりたい!」とお話させていただいた気がします。

それから5年。大学院を卒業する頃、施工は始まったばかりでしたが、伊東先生のスケッチから1/200の白模型、1/100の模型・・・とスケールアップして、色づいて、徐々に1/1に近づいていくプロセスがとても楽しかったです。住民ワークショップや検討会では昔から住んでいる人や小学生の子ども達、国土交通省遠賀川河川事務所の方々、コンサルの方々、たくさんの方のつながりと積み重ねがあったからこそ、今のカタチがあるのだと思います。その中で少しの間、関わることができたことを、嬉しく思います。

私事ですが、河口堰魚道から巣立っていったサケの稚魚のように(笑) 社会という大海の中、荒波にも負けず成長できたら、と思いつつ日々奮闘中です。そして、いつか河口堰に戻るべく、(残念ながら完成してから行けずにいるので) 1/1の河口堰魚道に行つて、芝生の上でのんびりしたいなと思つているところです。



松本 識史

九州工業大学
環境デザイン研究室
卒業生

出会いと苦難とこれからと

魚道公園プロジェクトが始まった2008年、私は修士1年生であった。伊東先生から新しく魚道設計のプロジェクトが始まることを告げられ、私は真っ先に手を挙げ参加させていた。私にとっては、その頃同時に、めぐり坂池のプロジェクトも同時進行しており、水辺空間の設計ならば考え方を応用できる部分もあるかもしれない、少し高を括っていた。しかし、それは大きな勘違いであったことを初めて現場に行った時に思い知る。コンクリートの無機質さとヒューマンスケールの欠如。コンクリートに覆われたこの空間を魚と人のための場所として、再定義する作業に没頭した。現況・スタディなど様々な模型を作りながら、伊東先生・コンサルタント・国交省・プロジェクトメンバーで議論を重ねた。この場所のデザインで大事なものは河口の特異性である干満、つまり時間の変化を風景として体感できることであると、伊東先生と話した。そして、もともと干潟であり水辺に近づくことができた空間を取り戻すことを目指した(残念ながら安全・管理の都合上、最終的に柵が設けられているが)。委員会の当日の朝まで、プロジェクトメンバー以外も巻き込んで模型を作ったことは今でも大変申し訳なく思っている。施工が完了し、植生も増え、魚の行き来も出てき

たという話を聞いて本当に嬉しかった。みんなで苦労した結果、現在のような魚・人のための空間として再生することができたのだと思う。

もちろん現在のかたちで完成形ではない。むしろ完成形はない。常に変化しながら、その場所があり続け、地域の人々にとって原風景となるようなそんな空間になって欲しい。「人」と「自然」ではなく、人がその場所の生態系の一部になる。そんな理想を追い求めて。

実は施工後の魚道公園に度々訪れている。行くのは決まって、少し悩んでいる時。その度に、当時のことや魚道公園のプロセスを思い出し、新たな発見をすることができる。このプロジェクトに関わることができて本当に良かったと思う。



秋の遠賀川魚道公園 (2013.10.12)



最終委員会へ向けて深夜の模型作業 (2010.1.28)



外での園路幅員の検討 (2010.1.25)

遠賀川多自然魚道プロジェクトに携わった方々

2008年度

小野 勇一、伊東 啓太郎、鬼倉 徳雄、淵上 信好、刀根 賢一郎、深田 祝夫、大里 至、青木 宣人、鬼塚 やよい
 坂本 栄治、荒牧 雄一、松尾 一四、池田 敬一、齋藤 勝明、田中 政喜、安高 直彦、吉田 俊幸、津森 貴行
 (遠賀川魚道を考え、望ましい遠賀川を次世代へ繋ぐ懇談会)
 津森 貴行、山口 英彦、河崎 信子、中司 哲夫、古賀 哲朗、中嶋 将之 (国土交通省遠賀川河川事務所)
 北野 真広、星 博、坪井 隆一、岩谷 将徳、嶋田 智行 (八千代エンジニアリング株式会社)

2009年度

鶴原 洋一、吉永 博幸、志村 裕子、大塚 秀徳、長畑 節則 (芦屋町役場)
 伊東 啓太郎、大村 康一郎、松本 識史、森田 大也、山本 礼子、秦 祐二 (九州工業大学環境デザイン研究室)
 津森 貴行、近藤 修、山口 英彦、松永 康裕、河崎 信子、松本 秀一、中司 哲夫、深浦 貴之
 (国土交通省遠賀川河川事務所)
 北野 真広、星 博、坪井 隆一、岩谷 将徳、嶋田 智之、浦 里美、田中 郁臣、中川 義守、岡本 隆之
 (八千代エンジニアリング株式会社)

2010年度

吉永 博幸、松本 憲造、志村 裕子、塩田 健司 (芦屋町役場)
 小野 勇一、伊東 啓太郎、鬼倉 徳雄、淵上 信好、刀根 賢一郎、深田 祝夫、大里 至、青木 宣人、鬼塚 やよい
 坂本 栄治、荒牧 雄一、松尾 一四、池田 敬一、齋藤 勝明、田中 政喜、鶴原 洋一、吉田 一彦、近藤 修
 (遠賀川魚道を考え、望ましい遠賀川を次世代へ繋ぐ懇談会)
 伊東 啓太郎、山本 礼子、秦 祐二、高橋 千裕、中本 昭 (九州工業大学環境デザイン研究室)
 近藤 修、山口 英彦、松永 康裕、河崎 信子、松本 秀一、深浦 貴之 (国土交通省遠賀川河川事務所)
 和泉 大作、高田 晋、宮島 泰志、田中 祥晃、久留島 卓朗、鈴木 太郎、足立 智也、山下 愛
 (株式会社建設技術研究所)
 白石 慎二、瀧口 正行 (松浦・白石経常建設共同企業体)
 石原 伸介、野口 信昭、黒木 博之、柳原 幾夫、高岡 千秋、江頭 秀利、麻生 啓次 (下川建設株式会社)
 大川 政典、木村 幸秋、仲野 和利 (有限会社大川産業)
 永富 英智、平原 義博、安倍 賀浩、小林 修、新 明彦 (直方舗道株式会社)
 嶺 保成、新家 大樹、坂本 政行 (有限会社ミネ圧送)
 大和 久芳、山本 義行、中田 康之、尾崎 稔、森友 健治、中村 剛司 (有限会社グリーン工業)
 中西 洋治、後藤 憲昭、今野 錠二 (日本規制警備有限会社)
 堀 利之 (株式会社 リュウキ)
 安田 一俊、竹下 靖行、富永 吉伯、北村 元、安田 耕輔 (株式会社日の丸建設工業)

2011 年度

吉永 博幸、塩田 健司、宮川 貴如（芦屋町役場）
伊東 啓太郎、秦 祐二、富井 俊、高橋 千裕、井手 孝亮、深町 健太郎、南 彩、掲野 慎一郎、須藤 朋美
（九州工業大学環境デザイン研究室）
近藤 修、西澤 洋行、山口 英彦、石坪 昭二、河崎 信子、梅田 真吾、伴 和美、深浦 貴之
（国土交通省遠賀川河川事務所）
和泉 大作、高田 晋、宮島 泰志、宮崎 太、鈴木 太郎、船戸 諒子、足立 智也、山下 愛（株式会社建設技術研究所）
大野 勇二、大貝 利昭、松本 伸彦（松正福山経常建設共同企業体）
中村 雄治、藤高 忠臣、中村 親春、長谷川 憲輝、松尾 次男、石田 新吾、中村 節子、藤高 良太（大光組）
岩永 憲悟、岩永 和樹、宇都宮 正人（岩永組）
権藤 勝彦、権藤 正一、阿武 秀俊（佐々木鉄筋）
横山 吉秀、和田 栄作、十亀 進、吉田 英晴、九門 英一、平野 数幸、平野 裕規、飯野 哲典
吉谷 昌隆、松本 剣吾、北村 恭子、北村 松美、嶺 厚三、加藤 睦、森下 隆志、栗田 豊美（株式会社庭匠）
飯束 雅治、渡辺 勇希、大谷 悟史、青木 徹（株式会社佐藤渡辺）
津田 修、花島 康太郎、入江 実、花島 浩三（九州大日精化工業株式会社）
大塚 義文、粕井 修二、粕井 貴広、田原 隆志、粕井 一夫（株式会社ケーネス）
斉藤 滋、北崎 和久、吉武 誠、田中 利通、川口 和敏、島田 雅敏、三井 富慶、尾原 勇気、三輪 勝文
（株式会社日の丸建設工業）

2012 年度

中西 新吾、塩田 健司、宮川 貴如（芦屋町役場）
小野 勇一、伊東 啓太郎、鬼倉 徳雄、淵上 信好、刀根 賢一郎、深田 祝夫、大里 至、青木 宣人、鬼塚 やよい
坂本 栄治、荒牧 雄一、松尾 一四、池田 敬一、齋藤 勝明、田中 政喜、鶴原 洋一、吉田 一彦、西澤 洋行
（遠賀川魚道を考え、望ましい遠賀川を次世代へ繋ぐ懇談会）
伊東 啓太郎、石松 一仁、高橋 千裕、井手 孝亮、深町 健太郎、掲野 慎一郎、伊藤 拓也、須藤 朋美
（九州工業大学環境デザイン研究室）
西澤 洋行、辰本 卓、石坪 昭二、原田 佐良子、梅田 真吾、柴田 みゆき、伴 和美、深浦 貴之
（国土交通省遠賀川河川事務所）
豊國 法文、三瓶 昌俊、中島 克人、中山 尚、鳥越 洋生、山本 良弘
光安 亮介、阿部 美智子、松原 千春、花木 良（株式会社建設環境研究所）
吉田 靖博、河野 勇、中野 敬一、春山 武資、三島 福男（株式会社三島建設）
金子 泰幸、日下部 誠、前田 明広、馬場 道行、能間 裕希（旭化成ジオテック株式会社）
沖村 政信、白土 良造、福丸 謙一、池田 区吾、佐藤 恭矢
井福 将太、永末 翔一、高嶋 和宏、田畑 竜哉、本松 崇裕（有限会社グリーン工業）
荒岡 時生、西村 順一、相坂 親男、飯塚 雅治、高橋 章（株式会社佐藤渡辺）
柴田 光樹（岩永組）
松浦 巧（有限会社松浦松陽園）

2013 年度

入江 真二、野本 拓也、井上 裕一、畑中 宏太（芦屋町役場）
伊東 啓太郎、石松 一仁、井手 孝亮、掲野 慎一郎、伊藤 拓也、田中 優太、山下 絢子、北村 圭佑、仲松 孝洋
（九州工業大学環境デザイン研究室）
光橋 尚司、辰本 卓、石坪 昭二、原田 佐良子、中嶋 将之、吉永 勝彦、深浦 貴之（国土交通省遠賀川河川事務所）

2014 年度

入江 真二、井上 裕一、畑中 宏太（芦屋町役場）
伊東 啓太郎、掲野 慎一郎、伊藤 拓也、田中 優太、山下 絢子、北村 圭佑、仲松 孝洋
（九州工業大学環境デザイン研究室）
光橋 尚司、平松 英樹、石坪 昭二、中嶋 将之、吉永 勝彦、田中 俊紀、田中 聡（国土交通省遠賀川河川事務所）